

---

# 猫

霧途雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫

### 【コード】

N1967I

### 【作者名】

霧途雲

### 【あらすじ】

それは、類稀なる猫の話。

猫。

右の前足の甲の部分を猫は小さいピンク色の舌で舐める。静かな部屋に猫は居るのに、それでも猫が足を舐める音はこの部屋には響かない。

猫は二十四歳だ。そう決まっている。二十四歳がそのまま猫の年齢なのか、それとも人間の歳で言うと二十四歳なのか。それは決まってははいない。理由は知らない。だってそれはそうだからそうなのだ。

陽射し。

猫が縁側へ出ると、陽射しは白くて曖昧な、それでいて真っ直ぐな線をいくつも猫に向かって延ばした。陽射しに意思が在って、陽射しがそれを望んだのだろうか。それとも陽射しの宿命として、役目を果たすのみなのか。

とにかく陽射しの白は、ほとんど神秘性を帯びていた。猫はひとつ、大きな欠伸をした。

庭。

陽射しが白を延ばすのは、なにも猫に向けてだけではない。自然に草の茂った庭にも、それは届いている。

庭の隅には腐ったヒノキで作られた小さな小さな小屋がある。おそらく小屋は猫の古巣であつたらう。

でも今は猫が部屋の方を好むので、腐った小屋には黴以外何も生きていない。

ところでどうして猫が部屋を好んで、どうして小屋が腐ったヒノ

キなのかについてだが、猫が部屋を好んだのは小屋よりも部屋がよかつたからで、小屋が腐つたヒノキなのは、猫が小屋よりも部屋を選んだからである。

塀。

そもそも庭に隅が在るのは、他でもない。塀のせいである。

塀が庭を作り、塀が隅を作り、そのおかげで小屋は隅に在つただ。

猫は塀の切り取る影で蒸し暑さを凌いだこともあつた。ただ空の青色が灰色や黒のもやもやに隠されてしまふ日とか、いつまで経つても雨がやまない日なんかは、塀はひどく完結したもののようには見えなかつた。あくまでもそれは猫にとつてそう見えただけなのだ。

けれども猫は、そういう日には決まつて、高い高い塀をじつと見た。塀はいつも、何も喋らなかつた。

終わりの先。

塀の向こう側には一体何が在るのかという問いを、猫は抱かない。もちろんそれは今、この時点において。

だから猫が二十三歳の時にはこの疑問に魂を悩ませたかも知れないし、二十五歳になつたら毛が生え変わるみたいに芽生え始める疑問かも知れない。それはわからない。当然。

そして猫には実際、塀の向こう側が見られない。くしゃくしゃになつた紙幣や錆びた機関銃や煙草の吸い殻を、猫はまだ、想像しない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1967i/>

---

猫

2010年10月29日01時42分発行